
受験と単語帳の朝

りき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受験と単語帳の朝

【Nコード】

N6292C

【作者名】

りき

【あらすじ】

受験を控えたある高校生の、いつもの通学電車での出来事。退屈な勉強だけの毎日が、一つの出会いから少しだけ変わっていく。

（前書き）

この作品は主人公の性別が決められていません。あなたの好きな設定でお読みください。あなたが男性なら、主人公を男性に。あなたが女性なら、主人公を女性に。もう一人の登場人物を異性にとすると、作者の意図する設定になります。

「responsibility」

驚いて顔を上げる。

ん？ 今の、誰が言った？

毎日通学で使う電車の中で、初めて見た相手にそう言われた。

「『責任』 大学受験で覚える単語の中で、一番長い単語かもね」

「……？」

座席に座って捲っていた単語帳を覗き込むようにして、その高校生は立っていた。

驚いた顔で見返していると、一度にこりと笑って、それっきり窓の外を眺めている。

へえ。これが一番長いのか。確かに長い、これ。

そう考えると、これを覚えたら、もう覚えられない単語なんてないような気分になって、少しだけ嬉しい。

教えてくれてありがとう、と言っべきか悩んだが、なんだかそれもおかしい気がした。

その高校生も、それ以上何も言わなかったので、気にしないようにして次の単語に目をむけた。

大学受験を数ヶ月後に控えた受験生としては、唯一の致命的な弱みである英語を克服すべく、通学中も惜しまず勉強を続けていた。

いつもは眠気との戦いだが、今日は、ちょっとだけ違った気分で勉強できそうだ。

次の日。

今日は座れなかったので、車両の最後部で壁を相手に、単語の書き取りをしていた。

スペルミスは、何よりもつたいない失点だ、と昨日の塾でも言われたからだ。

揺れる電車の中で、負けずに鉛筆を動かす事に必死で、すっかり昨日のことなど忘れていたところに、その謎の高校生は知らない間に側に居た。

「へえ。受験英語って、都市名も覚えなないといけないの？」

振り向くまでもなく、すぐ横でノートを見ていた。

さすがに今日は知らん振りも出来ない。

一体どういうつもりなのか、という猜疑心と、単なる興味心。

しかし、勝ったのは昨日のあの一言のお陰で、勉強がはかどった事実。

実際、「responsibility」は完璧に覚えた。

相手にそんなつもりはないのだろうが、借りを作ったような気分だった。

「えと、アメリカの主要都市だけでも、と思って……結構出るらしいから」

「ふうん、なるほどね」

そう言って、より近くでノートを見ようと、顔を近づける。

「このPhiladelphiaさ。日本人がnativeに言うときは、フィラデルフィアって言っても伝わらないの。なんて言えれば良いと思う？」

なんだか楽しそうに話しているが、さっぱり見当も付かない。

「さあ……。受験にスピーキングは無いし……」

「『古豆腐屋』って言った方が通じるんだって」

「古……豆腐屋？ 古豆腐屋、古豆腐屋……へえ、面白い」

「でしょ？」

満員電車の中で大きな声は出せないが、つい笑ってしまう。

そこに、大きなターミナル駅からの乗客が、一気に乗り込んで来た。

自然に二人は別々の方向へと押し寄せられていく。ちらりと目を合わせてすぐ、サラリーマン達の壁に隔たれる。

なんか、面白い。

一人になってからも、くすつと笑いが漏れてしまった。

古豆腐屋。へんなの。

そう考えると、おかしい事に、この単語だけは覚えたいと思ってしまう。

英語という『科目』に一生懸命取り組んで来たつもりだったが、それは正直言えば、なんの楽しみも生み出さなかった。

元々、受験勉強に楽しみなんて付属品はないと思っていたのだから、それでよかった。

でも、いま勉強しているのは英語という『言語』のような気がする。

私たちが、伝えたい、心や気持ちを表す言語。

こうやって覚えると、楽しいんだな。

少しだけ、大の苦手科目『英語』に対する姿勢が変えられそうだと思うたら、やっぱりなんだか嬉しかった。

次の日も、その電車に、その高校生は居た。

名前はもちろん、どこの高校に通っているのかも、何年生なのかも、お互いの事は何も聞かなかった。

でも、毎日の電車での数分間の会話で、いつも英語を『勉強』から、『言葉』として見る為のきっかけをくれる。

楽しかった。

英語へのわだかまりも徐々になくなり、みるみる塾での成績も上がって行った。

これなら希望大学へも、余裕を持って望めるだろう、というお墨付きまで頂いた。

あの電車での毎日のお陰だと言う事は間違いない。

今日会ったら、お礼を言おうと思っていた。

しかし、いつもの駅に着いたのに、その姿を見つける事はできなかった。

その日だけではない。

次の日も、その次の日も。

乗る電車変えたのかな。それとも、何か嫌な事しちゃったのかな……。

結局そのまま。

その日を境に、受験を迎える頃を過ぎても、もう一度会う事はなかった。

なぜ、毎日英語を教えてくれたのだろう。

その疑問すら、聞けていないのに。

数ヶ月後。

無事、第一志望の大学に合格し、今日が入学式を終えた初登校日だった。

まだ友達はいないが、希望と喜びに胸を溢れさせる。

正門をくぐると、早速先輩達のサークル勧誘の声が浴びせられる。嬉しくも恥ずかしい気持ちで足早に校舎へと歩き進む。

なにやらもみくちやにされてしまったが、やっと人だかりを抜けられ、一息つく。

「すごいなあ」

「That's crazy」

ん？

すぐ横で聞いた声に振り返る。

「ああ！」

「? oh, it's you！」

「この、大学の人だったの？」

「ああ、うん。というか、新入生だけど。ここに入ったんだ？すごい偶然！」

「本当だね！」

自然に笑顔が溢れる。

「何学部？」

「日本語学部、日本語学科」

「……え？ 日本語？」

「日本人だよ、真正正銘。でも、帰国子女ってやつ。半年前に帰ってきたんだ」

「ああ、そうなんだ。でも、日本語上手……」

あはは、と白い歯を見せた。

「楽しく覚えようと思って、朝から名前も知らない日本人の高校生に声を掛けて、話し相手になってもらった甲斐があったのかな？」

「それって……？」

見ると、毎日見せてきていた、あの楽しい笑顔を浮かべていた。

日本語をもっと覚えたかったから、話しをしたかった。

教えてもらっていた、と思っていたが、実は自分が教えていたという事。

日本語も、もちろん『科目』じゃない。

英語と同じ『言葉』だから。

きつと、そう言う事なんだろう。

「毎日相手してくれて、どうもありがとう。お陰でこの大学入れた」

「そんな、それはこっちの台詞です。どうもありがとう」

一拍置いて、二人はどちらからとも無く笑い出した。

あの毎日を思い浮かべて、電車ではいつも抑えていた分、今、大声で笑い合った。

まだ、あの時の単語帳は持っている。

受験をいい思い出にしてくれたことに、感謝してるから。

終

わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6292c/>

受験と単語帳の朝

2010年10月8日16時00分発行